

「火山がつくる地形 (15)」

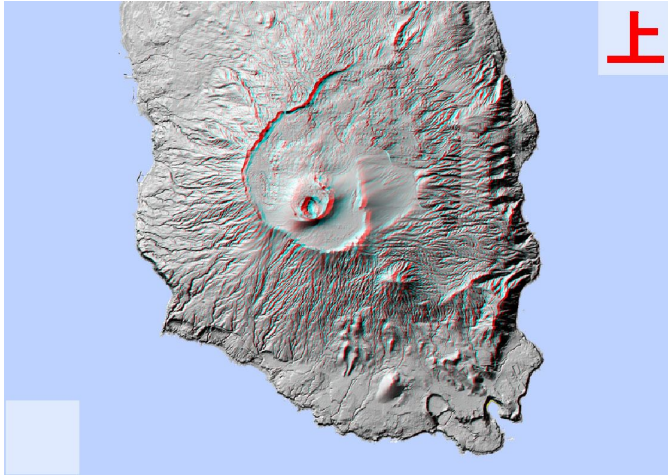
お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

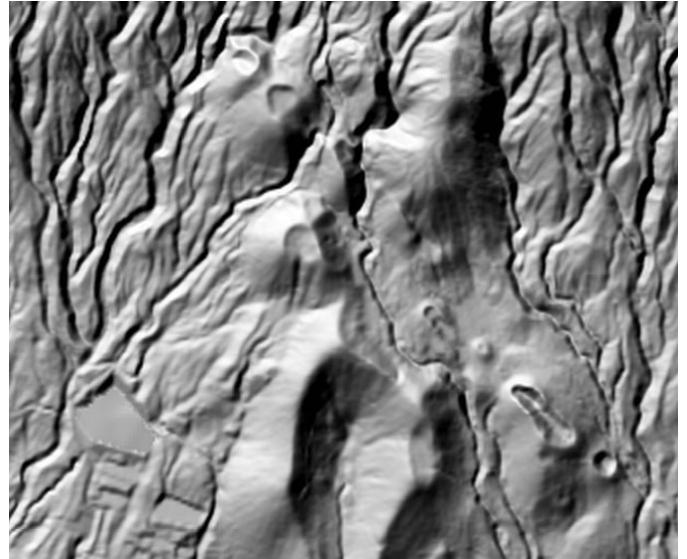
田中 千尋 Chihiro Tanaka

三原山は、富士山と同じで「玄武岩質のマグマ」由来の火山という特徴がある。浅間山のような「安山岩質のマグマ」とちがい、玄武岩質の溶岩は非常に流動性に富み、山頂から遠くまで流下する。1986年の噴火時にも、元町集落の寸前まで溶岩流が迫った。富士山の場合、「三島溶岩流」が駿河湾にまで達している。まるで川の水のような流動性である。

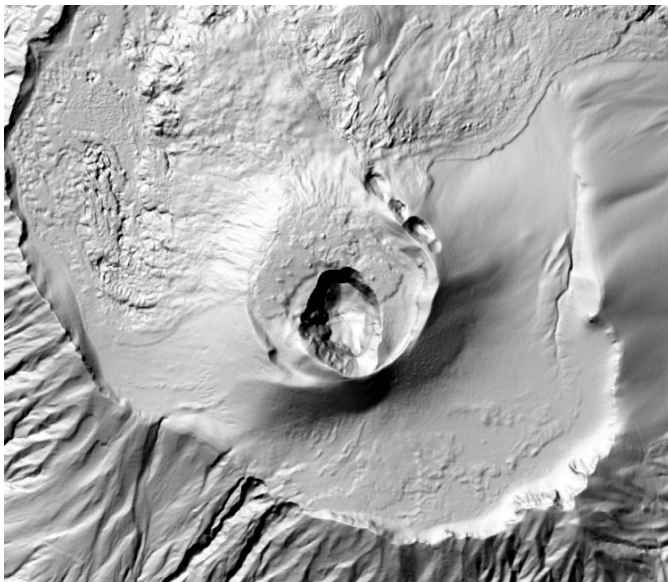
⑥三原山 (758m)



伊豆大島にある三原山は、さまざまな火山地形を有する。大島全体が「火山のデパート」のような存在である。有史以来大きな噴火を繰り返し、現在の姿に至っているが、最も最近の噴火は1986年(昭和61年)の噴火だろう。汽船を使って全島民が避難したのは、まだ記憶に新しい。東京都の有人島では、最も活発な活火山と言えるだろう。



山肌をよく観察すると、大小の小火口(寄生火山)が確認できる。これも富士山の特徴とよく似ている。これらは、マグマの通り道(亀裂)に沿って、一列に並んでいるのが特徴で、先の噴火で溶岩を噴出した「割れ目噴火」の痕跡である。



山頂近くは、顕著なカルデラがあり、外輪山の直径は約3 kmもある。その中に内輪山(中央火口丘)があり、中心に火口(噴火口)が見られる。よく見ると内輪山の北東側にも、数個の側火口が存在する。これは子どもが見てもすぐに「火山」と判別できる。

南東麓の海岸沿いには、マール(爆裂火口)も複数存在する。一番右の海につながっている入江は、波浮港として利用されている。



伊豆大島には、顕著な地層露頭も存在する。この「地層大断面」の写真は、教科書にも掲載されるほど有名だ。特に東京都の小学校の理科の授業で、教材として積極的に利用すべきだと思う。